コリント第二 ⑥

「出るべきか とどまるべきか」

コリント人への手紙Ⅱ　6章　　恵みの時代の信者の使命

Shikaoichurch.com

アウトライン

０．イントロダクション

Ⅰ．　逆転された価値に生きる　　1～10節

Ⅱ．　聖別されるべき

生ける神の宮　　11～18節

Ⅲ．　まとめと適用

命出るべきか、とどまるべきか
変わらぬ戦いに送り出されて

コリントの手紙第二とは？

■著者　…使徒パウロ。

■年代　…第一(55年)の2年後、57年頃。

■執筆場所　…コリントへの途上、ピリピ。

■対象　…コリントのキリスト者たち
(離散のユダヤ人と異邦人)

■目的　…アフターケア。献金の促し。
非難への弁明。再訪問の備え。

パウロのコリント訪問

❶最初の訪問(第二次旅行)・1年半滞在　50年

❷エペソ滞在中(第三次旅行)　手紙Ａを送付
第一の手紙を送付　54～55年

❸二度目の訪問(Ⅱコリ13:2)　55年
手紙Ｂ(悲しみの手紙)を送付

❹コリントへの途上で(ピリピ？)
テトスと合い、現状を聞く
第二の手紙を送付　55～56年

❺三度目の訪問　55～56年

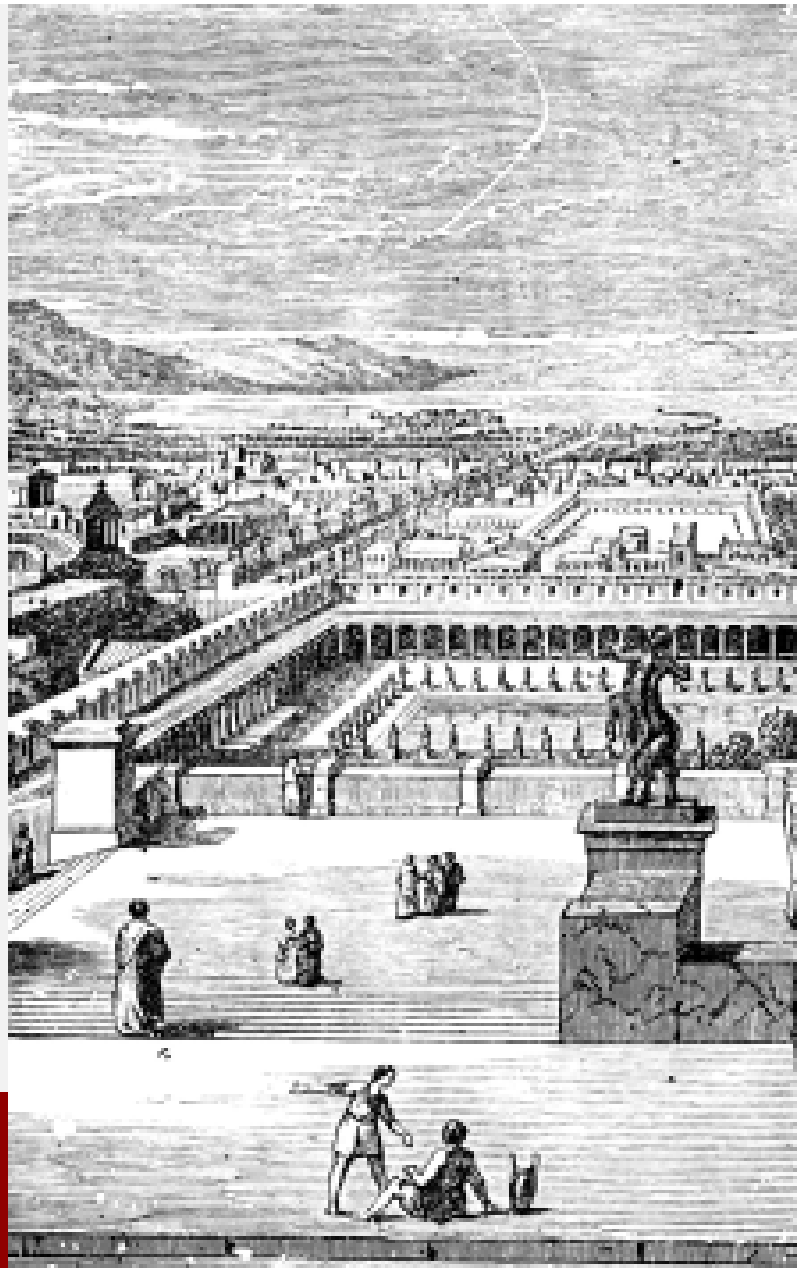
【コリントとコリント教会】

- アカヤ州(ギリシャ南部)の州都
  国際都市。ローマ人、ギリシャ人…etc。
  かなりの規模の**ユダヤ人共同体**も存在。

- **不道徳**の町。少年への性愛、複数の愛人。
  神殿娼婦の存在。**偶像崇拝**が蔓延。

- 異邦人信者が主流。偶像への警戒の薄さ。
  基本的教理からの逸脱。自由のはき違え。

第一の手紙の後に変化はあったのか？

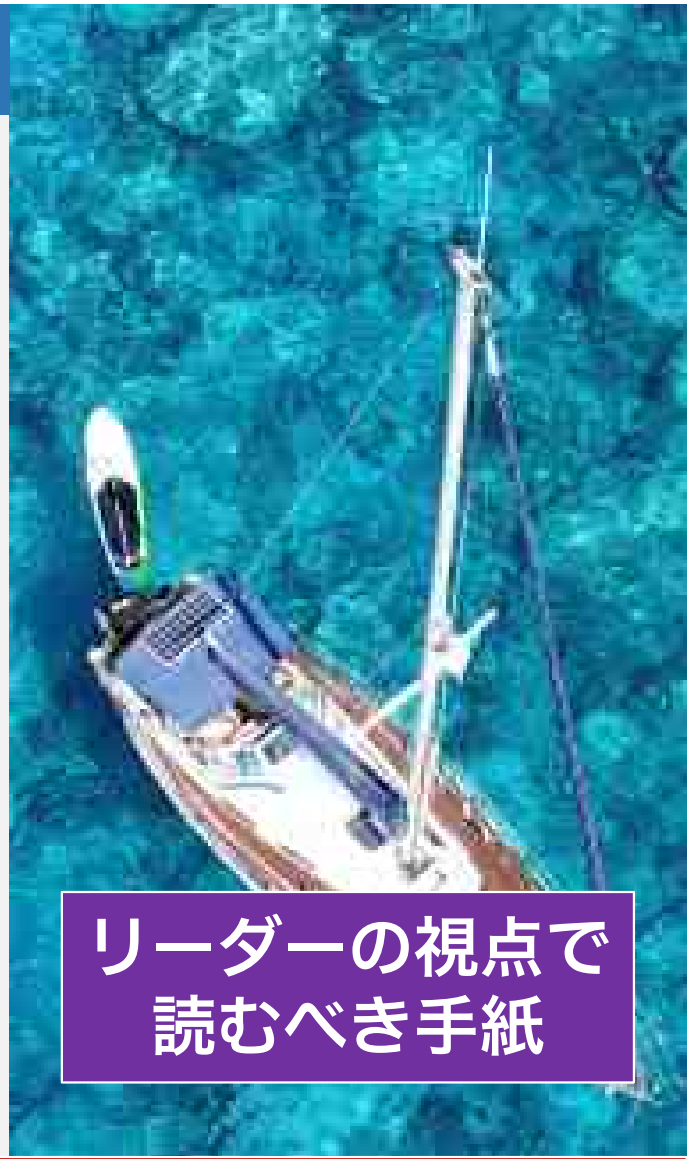


第二の手紙の特徴・テーマ

■第一の手紙は、コリントの信徒もよく知っているはずの**信仰のイロハのイ**を確認するもの。

■変化もあった一方で、パウロに強まる反感も。
❶グッドニュース…罪を犯した人の悔い改め
❷残念なニュース…献金が集まっていない
❸バッドニュース…パウロの使徒性への疑い

■**伝えるべきこと**は、第一の手紙に執筆済み。
さらに加えるとすれば、**パウロ自身の思い**。
➡**感情**が強く表れた手紙になっている。



パウロの思いをくみ取り、リーダーとして私の信仰を成長させよう

Ⅰ． 逆転された価値に生きる　Ⅱコリント6章1～10節

【恵みの時代の使命】 Ⅱコリ6:1～2

私たちは神とともに働く者として、あなたがたに勧めます。神の恵みを無駄に受けないように*してください。

神は言われます。「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、あなたを助ける*。」見よ、今は恵みの時、今は救いの日*です。

＊恵みである福音は、伝えなければ無駄になる。

＊イザヤ49:8

＊今は「恵みの時代」「教会時代」

…信じる人を救うための福音宣教の時代

【恵みの時代と教会時代】

恵みの時代
律法時代
教会時代
大患難時代
千年王国
メシア初臨
メシア拒絶
聖霊降臨
携挙
イスラエルの民族的回心
メシア受容
メシア再臨

【神のしもべの推薦内容】 Ⅱコリ6:3

私たちは、この務め*がそしられないように、どんなことにおいても決してつまずきを与えず、むしろ、あらゆることにおいて、自分を神のしもべとして推薦*しています。すなわち*、苦難にも苦悩にも困難にも、むち打ちにも入獄にも騒乱にも、疲れ果てた時も眠れない時も食べられない時も、大いなる忍耐を働かせて、

＊福音宣教の務め

＊神のしもべとして推薦するとは、すなわち…

➡主に従うがゆえの苦難への忍耐をもって

【義の武器】 Ⅱコリ6:6～7

また、純潔と知識、寛容と親切、聖霊と偽りのない愛、真理のことばと神の力により、また左右の手にある義の武器*によって、

＊“ホプロン”…義の“道具・器”（ロマ6:13）
光の“武具”（ロマ13:12）

➡神の義の武器。神の御言葉。

「エペソ6:17 救いのかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい。」

【そしりも悪評も】 II コリ6:8

また、ほめられたりそしられたり、悪評を受けたり好評を博したり*することによって、自分を神のしもべとして推薦しているのです。

＊コリントだけのことでなかったと分かる。

➡そしりや悪評も、神の僕である信仰者のリーダーには避けられないこと。

■問われるのは、主の御言葉に忠実に従った結果なのかどうか、ということだけ。

➡であるなら、全て甘んじて受けるだけ。

【世の評価・主の前の真実】 Ⅱコリ6:8～9

私たちは人をだます者のよう*に見えても、真実*であり、人に知られていないよう*でも、よく知られ*ており、死にかけているよう*でも、見よ、生きており*、懲らしめられているよう*でも、殺されておらず*、

＊人に誤解されるがままの指導者のリアル。

＊神の目に見える、信仰者の真実の姿。

■私たちが心にとめるべきは、人からの評価ではなく、ただ主の評価。➡往々にして真逆。

【信仰者の真実】 Ⅱコリ6:10

悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持っていないようでも、すべてのものを持っています。

- この逆転こそ、信仰者の真骨頂。
- 見た目や世の評価とは真逆の力を与えられているのが、主にある真実の信仰者。
  - ➡弱そうで強く、倒れそうで倒れない。
    何もないがゆえに、
    ただ主に立たされ、用いられている。

Ⅱ．　聖別されるべき生ける神の宮　　Ⅱコリント6章11～18節

【パウロの率直さ】 II コリ6:11

コリントの人たち、私たちはあなたがたに対して**率直に**話しました*。私たちの心は広く開かれています。

＊最初の出会い、再訪、再三の手紙、そして、この手紙。パウロは何も隠すことなく、**率直に**、コリントの人々に伝え続けてきた。

➡主ご自身と、すべての兄弟姉妹が、賛成者も反対者も、パウロの証人。

主に対して率直であるなば、敵対する者すら証人とされる

【思いの中で狭くなる】 Ⅱコリ6:12～13

あなたがたに対する私たちの愛の心は、狭くなってはいません。むしろ、あなたがたの思いの中で狭くなっている*のです。 私は子どもたちに語るように*言います。私たちと同じように、あなたがたも心を広くしてください。

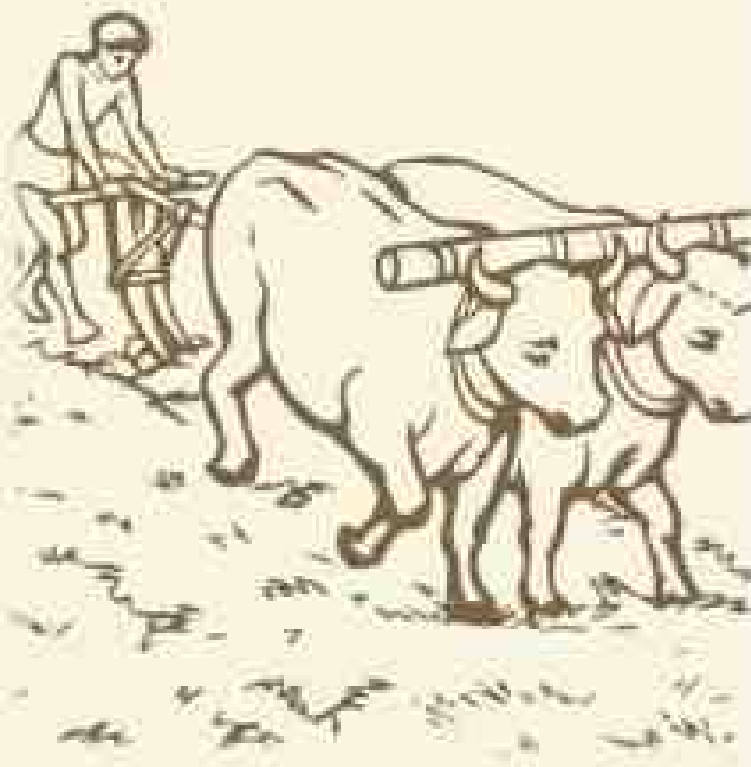
＊心が狭いと非難されていたのだろう。

＊道理の分からない幼子を諭すように。

■何度も拒まれながら、なお呼びかけ、
　コリントに向かって旅を続けているパウロ

【求められる世との分離】 II コリ6:14～15

不信者と、つり合わないくびき*をともにしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。 キリストとベリアル*に何の調和があるでしょう。信者と不信者が何を共有しているでしょう。



＊牛とろばにくびきをかけるようなこと

＊“よこしまな者(申13:13)”

“ベリアルの大水,死の淵(詩篇18:4)”

■**世との分離**が、コリントの重大な課題。

聖別が律法の主題。

異邦人信者の弱み

【生ける神の宮】 Ⅱコリ6:16

神の宮と偶像に何の一致があるでしょう。私たちは生ける**神の宮***なのです。神がこう言われるとおりです。「わたしは彼らの間に住み*、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる*。」

＊**幕屋**も**神殿**も徹底して聖別が求められた。

➡神の宮とされた、私たちも当然、同様。

＊出25:8,29:45,　＊レビ26:12,エレ31:1,33他

■イスラエルの最終的な回復は、主の日。

そのゴールに向かっているのが恵みの時代。

新しい契約

エレミヤ書31:33

これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約は
こうである　――【主】のことば――。
わたしは、わたしの律法*を彼らのただ中に置き、彼らの心に
これを書き記す*。
わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

＊生ける神のことば・主イエス・キリスト
＊福音を信じた者の内に、聖霊が住まわれる。

【主による聖別の命令】 Ⅱコリ6:17～18

「それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らから離れよ。――主は言われる――汚れたものに触れてはならない。そうすればわたしは、あなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる。――全能の主は言われる。」

＊罪とけがれからの聖別は、今も変わらぬ課題

＊ダビデ契約（Ⅰ歴17:13, Ⅱサム7:14），

■異邦人の救いの土台は、イスラエルへの約束

➡一連の手紙でパウロが再三確認。

数々の引用は、
旧約預言の集大成

ダビデ契約

歴代誌第一17:10～13

今、わたしはあなたに告げる。【主】があなたのために一つの家を建てる、と。

あなたの日数が満ち、あなたが先祖のもとに行くとき、わたしはあなたの息子の中から、あなたの後に世継ぎの子を起こし、彼の王国を確立させる。

彼はわたしのために一つの家を建て、わたしは彼の王座をとこしえまでも堅く立てる。

わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。

Ⅳ. まとめと適用

出るべきか、とどまるべきか
変わらぬ戦いに送り出されて

十字架以前の「神の国」

①永遠の王国　普遍的王国

②霊的な王国　（真の信者たち）

【地上での神の国】

モーセ～ゼデキヤ

③神政政治の王国

⑤メシア的王国・千年王国

イスラエルが約束のメシアを
受け入れれば、神の国が、
実現されるはずだった。

十字架以降、明らかにされた「神の国」

①永遠の王国　普遍的王国

②霊的な王国　（真の信者たち）

【地上での神の国】

モーセ～ゼデキヤ

③神政政治の王国

④奥義としての王国

（恵みの時代≒教会時代）

メシアを拒否　～　メシアを受容

⑤千年王国

新天新地

恵みの時代・救いの時代の大原則

■イスラエルがメシアを拒んだベルゼブル論争以降、
メシア的王国(千年王国)の実現は、はるかな将来に先延ばしに!!

■イスラエルのメシア拒絶から受容までが、**「恵みの時代」**
➡救われるべきユダヤ人と異邦人を救いに導くための猶予期間。
大患難時代は、恵みの時代のクライマックス。大リバイバル。

■恵みの時代の中心が、**「教会時代」**…聖霊降臨から携挙まで
➡福音を信じた者は、キリストの体である教会の一部とされる。

「主イエスを信じて救われる」のが、この時代の大原則

【恵みの時代と教会時代】

メシア初臨

メシア拒絶

聖霊降臨

携挙

イスラエルの民族的回心

メシア受容

メシア再臨

恵みの時代、教会時代の信者の使命

■恵みの時代の中心である教会時代の信者の使命は、
福音を伝えること。主イエスの弟子として育まれていくこと。

■恵みの時代の最後の裁き・大患難時代(主の日)には、
間もなく来られる再臨のメシアを信じることが求められる。
➡救いの御業を成し遂げたメシアは、裁き主として来られる。

教会時代にも求められている「聖別」

■律法時代も教会時代も、変わらず求められている信者の聖別。
世の罪とけがれから、きよめ分かたれること。

■律法時代は、律法により、約束の地において聖別が求められた。
教会時代には、世のただ中で聖別されることが求められている。

■困難な命令の実行を助けるために与えられているのが、聖霊。
内住される聖霊に依り頼んで、信仰者は日々変えられていく(聖化)

異邦人信者が陥りがちな、聖霊の内住についての誤解

■聖霊が内住しているから何をやっても大丈夫？

例）　悪霊の世界を描いたアニメにどっぷりだった親子

➡この誤解から、コリント教会は罪と混沌に陥っていた。

■世の人々との関係を絶つことはできないが、聖別は必須!!

➡自分自身からは、罪とけがれを取り除いていく必要がある。

自分に悪影響を与えるものは、遠ざけなければならない。

例）アルコール依存症者は、徹底してお酒を断つ必要がある。

■罪の生活から脱却し、きよめられていく過程が、信者の**聖化**の道。

出るべきか、とどまるべきか。それが問題だ!!

- 問題を抱えた地域教会を出るべきか、悩んでいる人は多い。
- 重要なのは、今ここで、なすべき課題に取り組んでいるか。
  ある地域教会を出ても、なお信仰が成長している人は、例外なく、
  自分自身の課題、使命に、しっかり向き合っている人。

- 責任を負い合い、時に戒め合える関係性は信仰の成長には必須。
  痛みを厭わない主の家族としての関係に身を置いているだろうか。

- どこに行っても、変わらぬ戦いがある。今ここでできないことが、
  他でできるわけがない。

★　避けられない戦いに、身を投じよう　★

■どんなにすばらしい地域教会に行っても、変わらぬ戦いがある。
どこにでも、偽りの教えは、隙あらば入り込んでくる。
主に忠実であろうとするほど、あざけられる時がある。

■最大の戦いは、自分自身の罪と闇に向き合うこと。
向き合えば、必ず敗北する。しかし、打ち砕かれた時にはじめて、
聖霊が、私の内で働いてくださる。

■真実にへりくだり、貧しき者の幸いを存分に味わわされて行こう。

打ち砕かれても歩んでいこう、必ず聖霊が勝利され、私を変えてくださる

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの罪を贖うために十字架で死に、

②墓に葬られ、

③三日目に復活したこと、を信じます。

私のうちにこびりつく、罪があり、なお戦いは続いています。

自分自身の闇に、向き合う勇気を与えてください。

無力に、打ち砕かれる私がいます。

どうか、内住される聖霊によって助け、私を変えてください。

よろこびもって、福音宣教の使命に、ますます強く遣わしてください。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。　アーメン」